27AB-pm425

『日本薬局方』収載生薬の変遷

〇中津川 華江[1], 五十鈴川 和人[1], 伊藤 陽一[1], 金 成俊[1]（[1]横浜薬大）

【目的】日本では古代より諸外国医療の影響を強くうけ、自国や他国の生薬を医療体系に組み込み、国民の健康に寄与してきた。しかし、生薬の品質や偽物による薬効の違いがあるなど、有害作用が見られる場合もある。このような理由により「日本薬局方」に生薬が収載され、一定品質以上の生薬を医療現場へ提供することが可能となった。そこで「日本薬局方」に収載されている生薬を初版からその増減を調査し、「日本薬局方」に収載された生薬の変遷について検討した。

【方法】「日本薬局方」初版（明治19年発行）から現在の第十六改正第二追補（平成26年発行）までに収載されている生薬を、追加・継続・削除に3分類し、その収載生薬を調査した。初版から第五改正までは近代デジタルライブラリーを利用した。

【結果及び考察】「日本薬局方」すべてに収載されていた生薬は全311品目であった。初版の収載生薬は102品目であり、現在の局方には176品目収載されていた。収載生薬は増加傾向にあり、特に第三改正や第七改正で追加品目が多かった。収載生薬の増減は当時の時代背景の影響が考えられた。初版から現在まで収載されていた生薬は甘草・桂皮・生姜など22品目あり、用途によって健胃整腸剤・鎮痛鎮痙剤・添加剤・その他に分類した。これらの生薬は時代背景の影響を受けることなく、医療に貢献していると考えられた。